

第1回 子どもの未来をひらく教育改革会議議事概要

日 時 平成19年10月18日(木) 14:00～16:00

場 所 小倉リーセントホテル 2階 玄海の間

出席者

(委員)池田繁美委員、池田正昭委員、井上美奈子委員、宇城照耀委員、岡本エミ子委員、小川威亜委員、香月きょう子委員、加藤信夫委員、久保哲哉委員、久米村京子委員、杉本松廣委員、鈴木澄男委員、谷美紀委員、田原憲二委員、恒吉紀寿委員、中川博子委員、仁保一正委員、沼田文子委員、福原かすみ委員、藤岡佐規子委員、堀川英樹委員、彌登章委員、元兼正浩委員

(事務局)教育長、子ども家庭局長、教育次長、教育委員会総務部長、教育委員会学務部長、教育委員会指導部長、教育委員会生涯学習部長、子ども家庭局子ども家庭部参事ほか

会議次第

- 1 開会
- 2 教育長あいさつ
- 3 委員への委嘱状交付
- 4 設置要綱説明
- 5 座長指名
- 6 議事
北九州市の教育の現状と課題について
- 7 事務連絡

配付資料

- 資料1 設置要綱
- 資料2 委員名簿
- 資料3 子どもの未来をひらく教育改革会議について
- 資料4 北九州市教育行政総合計画“いきいき学びプラン”について
- 資料4 参考 北九州市教育の現状と課題
- 資料5 子どもの未来をひらく教育改革会議での議論の視点

議事概要

1 開会

2 教育長あいさつ

大庭教育長：本日は第1回目の「子どもの未来をひらく教育改革会議」の開会に当たりまして、皆様方にはお忙しい中にもかかわらず、ご出席賜りまして、大変ありがとうございます。

さて、教育委員会においては、昨年3月末に策定いたしました「北九州市教育行政総合計画」通称“いきいき学びプラン”に基づき教育行政を推進しています。

これに加え、本年度からは少人数学級の実現や、中学校給食のあり方の検討をはじめとする北橋市長のマニフェストや、政策大綱の実現に向けての取り組みを進めているところです。

これらの取り組みについては、評価・検証も合わせて行っています。現状を申し上げますと、第1点目として、全国平均並みか、それ以下の学力や体力の向上。2点目として、小1プロブレムや中1ギャップなどの解消に向けた学校種間の連携のあり方。3点目として、教員の負担感を軽減し、意欲を引き出すなど、教員の資質の向上。4点目として、子どもの生活習慣の乱れと子育て、教育に関して学校任せにする傾向の改善。5点目として、子どもの規範意識の低下と非行の低年齢化。6点目として、障害のある子どもへの支援体制の確立と教育の専門性の向上。こういった課題があると認識しています。

こうした課題の解決のためには、学校における取り組みは当然ですが、地域コミュニティの能力を最大限に活用して、子どもの成長について責任を持つ保護者との連携を強化する取り組みや体制の整備・拡充が重要ではないかと考えています。

また、先ほど触れました特別支援教育を推進するために、障害のある子どもの社会参加や自立に向けた教育的支援の体制づくりを早急に進める必要があるとも認識しています。

詳しいことは、後ほど事務局から説明しますが、皆様方にはこれらの課題を踏まえ、今一度、教育の原点に立ち返りまして、具体的、実践的な議論を行っていただき、本市教育のさらなる前進に向けての提言をいただければ、非常に幸いであると考えています。

どうか、皆様方の活発な議論と提言を期待していますので、よろしくお願い申し上げます。開会に当たっての私のあいさつとさせていただきます。

・ 委員の紹介

委員25名の紹介

3 委員への委嘱状交付

池田繁美委員に代表交付

4 設置要綱説明（事務局より設置要綱説明）

第3条において、委員の皆様の任期については2年としています。その他、座長に関する定め、会議に関する規定、第9条で座長に対する委任規定があり、付則で本日付をもって施行するものです。

本会議の公開について、原則として公開とします。既に、本日の会議より公開しています。また、会議終了後には議事要旨を作成し、市のホームページで公開しますので、委員の皆様には了承をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

5 座長指名

教育長より座長を指名

座長：北九州市立大学文学部准教授 恒吉紀寿委員

・ 座長あいさつ

恒吉座長：ただ今、指名を受けました恒吉といたします。社会教育を専門としていますので、学校教育も含めて、広く子どもの未来のためにどういうことがあるのかということについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

これまで、北九州市の生涯学習や青少年ボランティア、子どもプラン等にかかわると同時に、国や県等の子ども、家庭教育、子育て支援等にもかかわってきました。

それから私事としましては、幼稚園から小学校まで、4人の子どもを抱える父親であると同時に、2年前にデンマーク教育大学客員研究員として、1年間、家族とともにコペンハーゲンで生活する機会がありました。そこで、研究生活においても社会全体で子どもを育むということ、そして共働き社会の中での子育て支援等について、実感すると同時に大きな刺激を受けて帰ってまいりました。

この教育改革会議の中では、親としての立場はもとより、専門家、海外での経験等も踏まえながら意見を述べると同時に、皆さん方の意見を整理し、まとめながら、北九州市民が子育て、子どもの成長を実感できるような政策の提言として、とりまとめていきたいと思っています。

本会議の設置によって、広く市民の中で子どもや教育のことについて関心や議論が巻き起こってくることを期待しています。どうぞよろしくお願いいたします。

・ 事務局紹介

教育長以下事務局の紹介

司 会：これからの会議の進行につきましては、恒吉座長にお願いしたいと思いますが、本日、委員25名中、23名出席いただいています。設置要綱第5条第2項の規定によりまして、会議の成立ということを申し添えておきます。それでは恒吉座長、お願いします。

6 議事

座 長：議題「北九州市の教育の現状と課題について」事務局から説明をお願いします。

事務局：資料3「子どもの未来をひらく教育改革会議」について
資料4本市教育行政総合計画“いきいき学びプラン”について
資料4 - 参考「本市教育行政の現状と課題」
資料5「子どもの未来をひらく教育改革会議での議論の視点」により説明

座長：ありがとうございました。ただ今、いくつかの資料等の説明を行いました。まだゆっくり目を通したり、検討する時間がないかと思えます。

それから、最後、資料5に沿って説明いただきましたけれども、事務局のほうから案として示されてはいますけれども、新しい視点等で大いに議論していただければということでしたので、あくまでも1つの目安ということで、こういった視点に縛られることなく、皆さん方が、「いや、是非ここは検討する必要がある」とか、「もっとここを充実する必要がある」ということであれば、そういった意見を基に整理をして、この教育改革会議の中でとりまとめていければと思っています。

今日は、第1回目でもありますので、今の事務局の説明や、課題の提示等にかかわって、皆さん方の意見とか、会議に対する期待、こういう資料を準備してもらいたい、むしろ議論していただきたい、あるいは取り組んでいただきたいという要望等がありましたら、それぞれ、自己紹介と、この会議の抱負というかたちで、お話しいただければと思います。

ただ、人数等多いことと、会議に対する時間の制約もありますので、申し訳ありませんが、1人3分を目安に、整理して話していただければと思います。ご協力よろしくをお願いします。

第2回目以降、議題、テーマ等も整理しながら、機会を見つけて、皆さんの発言するところや、必要に応じて、集中的に議論していく時間を設けたいと思いますので、申し訳ありませんが、今日のところは3分位を目安に発言をお願いしたいと思います。

加藤委員：基本的なところでひとつ質問です。確かな学力とは、どういう定義をされているのですか。今、ゆとり教育の中で提示されているのは、事前に資料として配布していただいた“いきいき学びプラン”の13ページに書いてあるものですが、この教育関係・学力関係が、今学力が落ちているのではないかという、批判にさらされています。市で提示されている確かな学力というのは、どのような学力を指しているのかお示しいただければと思います。

座長：1つ1つについて議論していくと時間がありません。確かな学力について、中身の確認をしたいということなので、手短にお願いします。

事務局：確かな学力については“いきいき学びプラン”の13ページにあります。資料では、学力検査の結果だけが指標として上がっていますので、確かな学力というのは、学力検査の結果だという疑問もおありかと思えます。

私どものとらえている確かな学力については、子どもの学ぶ意欲、そして自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断・行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

といった確かな学力、と定義をしています。

今回、学校教育法の改定によりまして、国も法的に学力というものの要素を3つに絞っています。1つは学習意欲。2点目が基礎的・基本的な学習内容の定着。3点目がそれを応用・活用する学力。私どもの共通理解は、この3つの要素と考えています。

座長：では、また後ほど、委員の考える確かな学力という、こういう方針にのっとって議論していただきたいということがあれば、発言の中でご意見を承ればと思っています。それでは、順に発言をお願いいたします。

小川委員：私は、小倉南法律事務所で弁護士をやっております。2000年から弁護士をやっていますので、ちょうど7年経ちまして、8年目に入ったところです。私は、福岡県弁護士会北九州部会で、複数の委員会に所属し、子どもの権利委員会の委員長をしています。そこで、少年事件の付添い人活動などをやっています。

私は、まだ人生経験が浅いので、ほかの委員の皆さんに比べてお話できることといえば、付添い人活動を通じて、非行を犯した少年と接した経験ぐらいです。そこで感じるのは、社会に出て会えばまた違うのですが、私が少年と会う時は、彼らは身柄拘束された状態なので、とてもおとなしいし、とてもやさしいというか、ひ弱いというか、そういった少年なのです。

そういう少年や親御さんを見てすごく思うのは、親御さんがとても疲れているというところです。いろいろ少年に問題があって、また、もしくは家庭に問題があって、友人関係に問題があって、少年は非行に走るのですけれども、そこら辺を親御さんが見てとって、保護して、指導してということが全くできていないということを感じます。もちろん、親御さん自身が非行の原因であることもありますから、そういう場合はもちろんですが。

教育改革会議における課題として、子どもの規範意識の低下と非行の低年齢化、北九州市における非行の割合が多いことが、当然問題の1つだと思いますので、私としては、この会議において、苦しんでいる家庭に何かしらの支援ができないかと、付添い人活動で感じているところです。

具体的にどう支援するのか、まだ私の中にアイデアなどはありませんが、そういった方向性を多少この会議に加えていただいて、委員の皆さんのアドバイスや意見などを踏まえて、いい視点、いい方針が導き出だせたらなと思っています。

久米村委員：前田市民センターの館長をしております。私は一般の市民なので、PTAや地域の中でボランティア活動をしながら、生涯学習推進コーディネーターや社会教育主事補として、生涯学習や社会教育について学ばせていただきました。そのあと、民間の採用ということで、今、館長職につきまして3年目となっています。

市民センターでは、皆さんよくご存知だとは思いますが、生涯学習、保健福祉の活動、子育て、環境や地域の防災活動、コミュニティ活動の中核施設として地域の特性を生かした事業に取り組んでいます。乳幼児から高齢者まで多くの市民の方に毎日利用していただいているところです。

中でも前田は、子育て支援にわりと力を入れていきますし、昨年度は生活体験通学合宿にも取り組みました。そういう日ごろから子どもや、その保護者の方と接してきて、今、子どもの状況や、保護者の考え方などをよく知ることができるようになりました。

通学合宿で子どもを見ていますと、異年齢の集団の中で暮らしたことがないのだなと、また、家庭や地域の中で自分の役割を果たしたことがないのではないかと、自然の中で思い切り遊んでいないのだなと感じました。それを支援する地域としても、地域のあり方みたいなものが試されているようにも感じました。

子どもには生活体験がとても大事であり不可欠です。体験することで、責任感を感じたり、協調性が培われたり、危険回避や社会のルールを体得することができると思っています。

現在、子どもの遊びや活動を支えてきた集団は衰退していますし、地域の環境も大きく変わって、地域社会もまた、ひと昔前みたいな共同体という意識もだんだん薄れているようにも思います。このような中で私たち地域がどういう貢献ができるかというのを、いま一度考えていきたいと思っています。

子どもや教育の問題を考えるといろいろな問題が重なりあって、格差も広がっていると思います。子どもは次の世代へ命をつないでいく大事な宝ですので、私たちは、目先のことだけにとらわれずに、長い目で、あくまでも子どもを中心に据えて、家庭や学校、地域がその役割を十分果たせるような環境整備が必要だと思っています。

この会議では、幅広い視点で次の世代を担う子どもの教育のあり方について、抽象的ではなくて、より具体的な内容や方法を話し合っ、それを施策の中にたくさん反映させてもらえたらと思っています。以上です。

池田繁美委員：株式会社池田ビジネスの代表、また池田ビジネススクールの学院長をしております。現在の教育に対して思っていることは、教育基本法にも書いていますが、子どもの人格を形成するためには、知育と体育と徳育のバランスが必要となっています。しかし、現在の教育を見ていますと、知育・体育が優先されて、徳育が軽視されているように考えているわけなのです。

私は会社を経営していますので、徳育については、集団生活の中で協調関係を築かせるなどの社会性を身につけさせてほしいと思っています。会社あるいは組織に入りますと、人間関係能力とかコミュニケーション能力とか一般の社会常識、規範意識、あるいは礼儀、目上に対する言葉遣い、態度、こういったものが必要になってきます。

しかし、現在新しく入ってきた新入社員を見ていますと、どうしてもそういった社会性が欠けています。本来、企業からすれば、基礎学力と社会性を身につけた人たちが会社に入り、会社では、その固有の技術や専門的な知識を指導し、戦力にしていくと思っているのですが、今、例えば新入社員を研修しようとしたら、固有の技術・専門的知識の前に、社会性・社会常識などを教える時間が非常にかかっている。こういったことを考えると、やはり知育・体育・徳育の中で徳育と、いわゆる社会性を身につけていないということを非常に感じるわけです。

ですから、この場で私は、企業人・経済人でもありますので、社会に出たら徳育が非常に必要だということを強調していきたいと思っています。また、心の育ちの推進を議

論していただき、提言になればいいと思っています。

教育現場のことや教育行政のことについては、あまり明確ではありませんので、皆様からしっかり学びたいと思っています。以上です。

池田正昭委員：私は、TOTOで今年から人事部を担当するようになりました。それまで入社してから17年間、TOTOのトイレや水洗機器、ウォシュレットをつくるための原材料や部品、そのためのシステム開発を中心にやってきました。

今年から、人事部のマネージャーをやっているのですが、まだそういったところでは、全くの素人です。やはり企業もいろいろと進化していく中で、グローバル化などいろいろな形で対応していかななくてはいけない。そういったときに、いろいろな目線を持った人が必要だということで、私が登用されたと考えています。

今回、こういった大きな仕事を拝命し、頑張ろうと思っていますが、どこまでできるかは、少し大目に見ていただければと考えています。

私が教育委員会の方からお話をいただいたときに、本日の議論の視点で非常に共鳴したところがあります。子どもの特性を伸ばすという項目が2番目にありますが、私も企業に入ってくる新入社員を見ていると、基礎能力は高い人たちが非常に多い。

しかし、実際に配属されてからの対応力・応用力がない。これは経験がないのもありますが、80年代や90年代に入った社員たちはもまれながら、また先輩たちを見ながらできるところがありました。しかしITや少子化が進むことで、子どもがマニュアルをこなすことはできるけれども、自分で考えて、考え抜くとか、やり抜くとか、そういったことが学校教育の中で行われていないのではないかといったところを非常に感じました。

そこを私どもが人事部としてやっていかななくてはいけない、または現場のOJTで推進していかななくてはいけないというのが、今、企業の課題となっています。

ですから、この教育改革会議の中で何か1つでも子どもの特性を伸ばすような施策が展開でき、日本を、世界をリードするような子どもが、北九州から1人でも出せるようなことができれば、1つ成功したのではないかと考えています。

それともう一つ、私は子どもが幼稚園に行っています。私たちが幼稚園のころは、この子がおとなしいから自閉症だとか、何々だから自閉症だとかなかったのだけれども、この間、先生から聞くと、自閉症の定義そのものがものすごく広がってきて、少子化や親の生活スタイルの多様化によって、いろいろな意味で子どもがたくさん悩みを抱えるようになっているが、親として気付いていない。

また、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住まないとか、兄弟が少ないとかもあるのだけれど、本人たちが何をもって気付くのかというのが非常に深刻な問題になっている。そういう話を聞いて、実は私の子どもも、ものすごく元気でわんぱくなのだが、好きなことしかやらないことに気がついたのです。

物事に対する関心が薄いというのを非常に感じていて、これから親としてどうやっていけるのか。そういったところでも、こういう特別支援教育の充実といったところは、子どもの立場になって本当にできるようになればと考えているので、このあたりも少し勉強して、意見や提案を述べられればと思います。どうぞよろしく願いしま

す。

井上委員：私は、北九州子ども劇場とって、北九州で約34年間、子どもに文化芸術体験と知的な生活体験活動を続けている団体の理事長をしています。

子ども劇場では、家庭でも地域でも学校でもない、第3の世界として子どもが集まってくる。その子どもを見ていると、とても生きづらそうだとすることを強く実感します。

体験活動を子どもと一緒にやっていく時は、子どもが主体で、子どもが主人公となった活動をやっていきます。そうすると、ひ弱そうに見える子どもがすごく生き生きと主体的になり、大人がかえって触発されたり、逆に元気づけられたり、いろいろなことを教わったりする部分がたくさんあります。

子どもが今、本当に、不安だ、心配だ、気になるということが多々語られるのですが、実は子どもの本来持っている力というのは、決して弱まっているわけではないのではないか。逆にその力を、大人が保証してやる場がないことが、そういう子どもが多いと映る原因なのではないかということ、活動を通して感じています。

ですから、子どもの本来持っている力を十分に発揮していける教育システムをつくっていくことが、とても大切ではないかと強く思っています。是非、この会議の中で、そういうシステムが北九州の中で根付いていき、子どもが豊かに生きていけるようになればいいなと思っています。

また、私たちは会の中で、国連で批准された「子どもの権利条約」というのを指針に活動を行っています。その中で、私たち大人が随分気付かされることがたくさんありましたので、是非、これから審議していくときに、この「子どもの権利条約」の視点も入れながら考えていけたらいいと思っています。よろしくをお願いします。

宇城委員：現在、東筑紫学園の理事長を務めており、また、福岡県私学協会の北九州支部長という役職を務めております。我々は毎日ここに出されているようないろいろなことを、それぞれ私学の間で、ああじゃない、こうじゃないと議論している立場です。

現在、主に私としては、中学校、高校の立場がありますので、そこからいろいろと話を聞いたり、申し上げたいと思っています。

今現在、私立の高校は、福岡県で60校あります。その中で4地区に支部が設けてあり、北九州地区は17校の高校が北九州支部ということでやっています。ご存知のように、主に中高は県との関係がいろいろ深いところがあります。市にもいろいろご協力いただいて、いろいろな政策や補助をいただいております。

県では、公立高校6割、私立が4割という協定の基にやっています。私学が4割を担っているというのは、全国的に見ますと、東京、京都、そして福岡の順で、全国で3番目に福岡県が高いのです。

私学としては、それぞれの学校が建学の精神に基づいて、独自の教育方針を打ち出してやっています。私学全体の支部の先生方の意見も今後お聞きして、それを踏まえた上で、議論をさせていただきたいと思っています。

その中でも、今日の資料の中では、やはり家庭の教育力及び地域の教育力を高める

のが一番です。今、高校教育の中で抱えている問題は、学校で何かあった場合、家庭にまず連絡をしても、ほとんど誰もいない、まず連絡が取れないということと、今、子どもは地域から見放され、家庭から見放されて、あと行くところは学校というようなことも言われています。

そういう意味において、主に家庭の教育力、地域の教育力という話を聞かせていただきたいと思っています。

岡本委員：私は今回、臨床心理士として出席しているのですが、保育園の園長もしています。それで、全国で臨床心理士の資格を持っている保育園の園長が何人いるのだろうかと思ひ、臨床心理士の名簿を調べたところ、全国で私1人でした。ということで、私は臨床心理士として、保育園の幼児教育をやっていきたいと考えています。他にはスクールカウンセラーもしていますので、中学校の子どもの様子も見ています。

今回、最初に私が言いたいのは教育です。教育というのは一体何だろうか、ということをしっかり考えたいと思っています。教育というのは、「教」教えると、「育」育つという2つの言葉から成っています。だけども、今まで育てる面がわりに少なく、教える面がすごく強い。要するに教師はあるのですけれども、育師という言葉はほとんど聞かない。「イクシ」というのは育てる師です。これからは、その育てるということがとても大事だと思います。しかし、意識的には、まだまだ教師は教えさえしたらいいというのが教師の感覚でもあるし、周囲の社会の大人たちの考えでもあるのではないかと思うのです。

家庭での学習をほとんどしない子どもが増えているとか、就寝時間が遅いなど、生活習慣の乱れが見られますが、やはり「育てる」というところから考える。どうしてそういうことが今起きているのだろうかという基本的なことを考えていきたいと思っています。

資料4で、心の育ちの推進という言葉がありましたので、「ああこれ、うれしいな」と思いました。今から皆さんで「育てる」ということ、「育つ」ということ、私たちが育てるだけでなく、子ども自身の育つ力、そういうことを皆さんで検討できたらと思っています。

それともう一つ、実は私は、放課後学童保育クラブの運営委員長もやっています。そのときに一番感じるのが、学校との関係がすごくあるのですが、教育委員会と連絡を取りたいと思っても、どなたに連絡を取っていいか分からない。基本的には、学童保育というのは子ども家庭局に所属しています。今回、資料を見させていただいて、この教育改革会議の中に学童保育のことが載っておりました。それで、すごくうれしかったのです。また、子ども家庭局長や参事が出席していただいたので、よかったですと思っています。

ぜひ縦割りだけでなく横の連携ができたらと思っています。今後楽しみにしています。よろしくをお願いします。

香月委員：北九州市医師会より、学校保健に詳しい女性の医師をとということで私がまいりました。私は、平成14年より小学校の学校医をしています。また、昨年より医師会で学

校保健の担当理事をしています。その中で、子どもが健やかな一生を過ごしていくためにはどういうふう成長していくのが望ましいか、どういったことがサポートできるのかということを考えながら行っています。

学校保健の問題としましては、性感染症の増加が非常に頭を悩ましています。初交年齢が低年齢化してきています。15歳の男子で8%程度、15歳女子で18%のセックス経験があるという報告があります。

この場合、医者立場から一番怖いのはエイズです。エイズは今のところ、発病を抑制する薬はありますが、治す薬はありません。ということは感染したら、一生薬を飲み続けていかなければエイズになって亡くなるということになります。この薬が非常に高額で1日何千円もします。計算したことがあります、例えば20歳で感染し、70歳まで生きたとして、薬代だけで約8000万円かかります。こういったことは、予防できるのです。性感染症に対する教育を重点的に考えていただけたらと思います。

それから、先程から言われていますように、生活習慣の乱れからさまざまな問題が出てきています。特に男子は、肥満が増えています。逆に女子の場合は、思春期のやせが非常に問題になっています。なぜ思春期のやせがいけないかと言いますと、出産のときに困るのです。低出生体重児が非常に多く生まれます。イギリスの保健婦の有名な研究がありますが、低出生体重児が多く生まれるということは、狭心症、心筋梗塞などの虚血性心臓病が非常に多いという結果も出ています。生活習慣を考えていただいて、よりよい健やかな一生が過ごせるような教育、啓発活動がとても大事だろうと思います。

それから、日本体育協会のスポーツドクターもしております、子どもの体力の低下というのを非常に感じています。あるとき、学校保健委員会で小学校の先生に「放課後遊べますか」とお尋ねしたのですが、「ほとんど遊べません」と言われました。時間的な問題が非常に大きく、遊び場も少ないと。安全性の確保をするということ考えると、とても放課後遊べないと言われていました。人間は成長するのに刺激や遊びは必ずいります。動かなければ、体力はつかないし、筋力もつきません。そういったこともさまざまな視点から、皆さんとともに考えていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

久保委員：中学校を退職して15年になります。その間、子育て支援に関わってきました。教育改革会議での6つの議論の視点、この6項目が、北九州市の教育課題との整合性があるのか。北九州市の教育課題は何なのか、一般市民や保護者がこの6項目を見て、「あ、このことだな」ということが分かる横糸のような文言が必要ではないかという気がします。

具体的に言いますと、私は、北九州市の教育課題を次の6項目と考えています。これはたたき台で結構です。まず、北九州市と教育委員会のあり方。ここが一番重要だし、一番大事なところだと考えています。もう少し、ソフト面を大事にしてもらえないかという気持ちがあります。2番目は、子どもの生活リズムづくりです。子どもの生活そのものが崩れかけており、徹底してこの啓発が必要です。3番目は、教師が

子どもと向き合う時間の確保。教育委員会はどう思っているかは分かりませんが、素晴らしい先生ほど時間が足りないと思っています。4番目は、子育て支援のあり方。親御さんが、「ありがたい、なるほどこういう施策か、これはいいな」と思うような施策がもっと欲しい。5番目は、教育困難校への対応。残念ながら私も教育委員会におりましたが、20年来、結果としては放置されている。このことを重く受け止めてほしい。6番目は、心の育ちの推進。括弧でくくっているのはここだけで、(青少年の健全育成を含む)と書いている。これは分かりやすいです。私はこれをむしろ、「いじめ・不登校・非行」と具体化したらどうかと、そんな気持ちさえします。

親御さんたちは、学校に子どもを向かわせる時にいじめられなくて帰ってくるかなと、そういう気持ちを持つそうです。こういうふうに横糸を、「具体的な」、「含む」とか、「中心にして」と、そういった文言があると、一般の人たちや保護者が見たときに分かりやすいのではないかと思います。自由討議もあるようですので、もっと具体的にお話をしたいと考えています。以上です。

杉本委員：教職員組合の専従をやっています。本日の会議の内容は、いろいろな意味で幅広い論議をするということで、非常に緊張しながら話を聞いています。各界各層の方が集まり、今10人ほど発言がありました。そういう視点もあるのだなということで、いろいろな意味で意見を固めていきながら、自分の意見をなるべく反映させていくようなかたちで意見を述べていきたいと思っています。

私も5年ほど前は教育現場にいて、今、専従というかたちで現場を離れておるのですが、いわゆる学校の力をつけていくという意味では、教職員がやる気を起こすような現場をつくっていくと。それだけではないのですが、そういう視点でどうかたちでやっていけば、本当に子どもと向き合うような時間の確保を含めて、教職員にやる気が起こってくるような学校づくりができていくのかということ、意見反映ができればと思っています。

是非、いろいろな方の意見を聞きながら、学んでいきたいと思っています。よろしくお願ひします。

鈴木委員：青葉小学校校の校長をしております。計画推進上の課題ということで、確かな学力と体力の向上の他、6点挙がっています。見ますと、学校教育の担うところが非常に大きいと思っています。本校もそうですが、これらの課題に対して、それぞれの学校が年度当初、学校経営方針を校長が示し、それぞれの課題に対して具体的な目標を掲げ、それを達成すべく、個々の分かりやすい方策を打ち出しています。そして、教職員の共通理解のもと取り組んでいます。

ところが、その成果は徐々に出ている部分もありますが、決して満足できるような状況ではないと思っています。それは、どこの学校もそうではないかと思っています。これらの課題を解決するには、やはり教職員一人ひとりの意欲・情熱・指導力などが、是非必要です。

その中であって、北九州市教育委員会も学校評価を行っています。本校でもその目標に対して子どもはどうだったか、職員はどうだったのか、そして子どもをいつも

見ている保護者からはどうなのか、アンケート及び評価を行っています。そしてその結果を分析して、改善の方向を公表しています。

また、本市も取り組んでいます。業績評価ということで、それぞれ個々の職員に目標を掲げさせて、達成できているか評価をしています。こういうことによって、各職員の意欲・情熱は確かに向上していますが、先ほど言いましたように十分な結果ではありません。

そこで、私は3点、今、考えています。1つは、管理職を含め、やはり教職員の一層の資質向上、これが是非必要だろうと思います。学校の中でも取り組みますが、教育行政としての取り組み、施策ももっと必要だろうと思います。

2つ目が先ほどから出ていますが、教育の原点といわれる家庭の教育力の向上の具体的な施策。やはり子どもは、親の後ろ姿を見て育つ部分がたくさんあります。具体的な向上策が是非欲しいと。

最後ですが、学校任せの体質というところがどうしてもあります。地域で起きたことについても、地域から学校に苦情があるとか、いろいろ対応に苦慮しておるのですが、学校任せの体質、この改善と業務のダイエット化というのを、是非推進しなくてはいけないのではないかと思います。教育活動に専念できる学校体制の確立、これが是非必要ではないかなと思っています。

ほか、多々ありますが、それぞれのテーマでまた述べさせていただきます。よろしくお願いいたします。

谷委員 : ドンナ・マンマ編集部の編集長をしています。私がドンナ・マンマの編集を始めて10年経つのですが、この10年間、お母さんたちと接する中で、保護者の物の考え方や、物へのこだわり、価値観がすごく変化してきていると感じています。いい方向への流れであればいいのですが、なかなかいい方向に進んでいるというふうには感じられないのが最近の感想です。

今、子どもを育む中で、私が一番問題点だと思っているのは、やはり親として、大人としてのあり方ということ、私たち親や大人自身が分かっていないのではないかと、ということにすごく危機感を感じています。

雑誌の編集の中でも、10周年の記念事業として1年間、親として大人としてのあり方を、保護者と一緒に考えていこうという企画を、今、組んでいます。

具体的にいいますと、誰でもなる可能性のあるモンスター・ペアレンツという現象をはじめ、例えば学校の先生が、していいことと悪いことの区別がつかない指導をしてしまう、教師の規範意識の不足。保護者としては、例えば授業参観で私語をずっと続けていたり、朝食を食べさせないで学校に行かせている保護者が、一方では教師の欠点を批判しているというような、そういう根本的な大人の規範意識の欠如が子どもの考え方をつくってしまっているのではないかと、というふうにすごく感じています。

子どもは、学ぶ世代で、私たち周りの大人がすることを見て、言うことを聞いて、育っているとすごく強く感じています。ですから、今の子どもが悪いのではなく、私たち大人が原因をたくさん持っているのではないかと感じています。

そこも含めて、今回の会議を通じて、親として、大人として、子どもの未来をどう

つくっていくのかということ、子どものことだけではなく、大人として、社会の中の保護者として一緒に考えていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

田原委員：中学校長会を代表してこの会議にまいりました。先日、中学校完全給食に向けて、4校がモデル校に決定したと報道されました。その報道以前に、中学校長会はこの給食に反対であるという報道がされました。ここにおられる委員の皆さん方も、「なんだ、中学校の校長さんは」という思いがあるのではないだろうかと思いつつ、今日は印象が悪い中で来ているのかな、という気がしています。

モデル校実施となりましたので、教育委員会に対してどうこうということではなくて、これをやっていくためには、非常に課題が多いことを覚悟の上、4校の校長と教員の方々だけにお任せするのではなくて、63校が力を合わせて、いい意味で、この完全給食に向けて検証していきながら、どうかたちが本当の姿なのかということ、校長会としては見守っていきたいと思っています。

また、最近、新聞報道等でちょくちょく出始めました、学習指導要領の改定作業が文科省から出ていますが、学校の教員は改定されるたびにやり方が急に変わるということで、今までもその対応に非常にほんろうされています。

教師は本当の意味で力を持っているのですが、その力を発揮できないまま次の施策へと移っている状況にあります。一生懸命取り組んでいるのですが、その内容とスピードについていけないというのが学校での現状ではないかと思っています。

それと合わせて、先ほど委員が言われましたが、学校に非常に理不尽な要求等突きつけて来る保護者が、最近は大変増えてきた。教育委員会も学校支援チームをつくりましたが、そこに報告するまでもなく、学校で処理しようと真摯に対応していると、あまりにも学校教育の指導の範疇を超えた要求となっています。

例えば、学校職員の人事の問題であるとか、組織上の問題であるとか、極端な例は、具体的に申しますが、「うちの子どものことで相談があります。うちの子どもは友人がいません。友人をつくってやってください」「いえいえ、お宅のお子さんは、A君、B君、C君とちゃんと遊んだりよくしゃべったりしていますよ。」「いいえ、違います、A君、B君、C君は他にももっとたくさん友達がいます。うちの子だけの友達をつくってください」と。こういうことを平気で言う親がいる。

そのように、違うと言っても、そういう親はまた学校へ電話をかけてくるなり、実際に来たりします。そうすると対応するのは空き時間しかないのです。その時間は、教材研究をしなければならないのですが、その時間が全部取られてしまう。まして、そういう親は自分の都合のいいように、放課後ならと言っても、放課後に来ずに日中に来ます。だから、本来教師が行うべき教育、教科指導がなかなかできない現状です。そういう中で、非常に学校の教師は多忙感を感じつつ疲弊をしている。

新聞報道でも、一部の教師のいろいろな不祥事件があります。そのたびに、教師、学校批判がされるわけです。大部分の教師が一生懸命頑張っているのですが、なかなかそういう面に日が当たらないというのが現状です。

いろいろな点で、学校も質の向上を目指し、改善しなければならないと思います。しかし、やはり家庭の教育力や保護者の意識改革というものがもっともっとクローズ

アップされるべきではないか。教育イコール学校というイメージが強過ぎるのではないだろうか。しかもそれは、学力向上の面ばかり向いているという気がしてなりません。

いろいろな意味で、今後の会議の中で、あれもこれも反対とそういうわけではなく、様々な意見をお聞きし、また学校の中の具体的事例を示しながら、皆さん方と良い方向へと考えていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

中川委員：今年度北九州PTA協議会の副会長をしております。中学2年生と高校2年になる娘が2人います。上の娘が小学校に入学すると同時にPTA活動を始めて、もう10年程やっています。

小学校のときには一生懸命PTA活動にかかわってきたお母さん方が、中学校になったら、意識が薄くなり、パタリと足も向けない、顔も出さないというようになります。小学校と中学校でこうも違うのかというのを、今とても実感しています。

子どもが中学校に上がっても、PTAの役員というものはなかなか足が抜けられないもので、小学校の時にしているのだから、中学校になってもしてくださいと言われ、私も嫌いではないので引き受けた時に、「じゃあ小学校のときに一生懸命活動していた

ちゃんのお母さん、中学校でもどうですか」と声かけたときに、「いえ、もう働き出したので、一切学校のことには、もう手伝えません」といった方がとても多いのです。

なぜかと思うのですが、小学校の時には、子どもに手が掛かるし世話も焼かなければいけない。それだけ子どものことに対して、小学校の間は親がとても目を向けているのですが、それが中学校に入ると、もう子どもは自立できた。もう学校に行って部活をして帰ってくるのは夕方や夜だから、あとはもう私の時間、という感じで、全くお母さんたちの意識が子どもに向かなくなっているのではないかと。私も保護者で、完璧ではないので、うまく言えないのですが、子どもにかかわる保護者の意識がすごく薄れてきているというのを感じています。

世の中で、いじめなどいろいろな報道がされています。いざそれが自分の子どものことだったら必死になるのですが、それが一歩、新聞上やテレビなどよそのことになると、「うちの子や学校じゃなくてよかったわ」「自分でなくてよかったわ」となり、親にしても、学校の先生にしても、地域の方にしても、目が向かないのです。だから親として、何か起きたときに、「うちじゃなくてよかった」ではなくて、本当にもし自分だったらとか、人ごとのように考えないでほしいというのを親として最近すごく感じています。

私は、今年度PTA協議会で役員をさせていただき、いろいろなところで会議に出席して、まだまだ勉強させてもらっています。ここでも皆様方、いろいろな意見がある中、私自身もまだまだ子育て真っ最中で、勉強させていただきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

仁保委員：私立幼稚園連盟の会長をしております。今日は遅れてしまったのですが、「幼年期教育研究大会」が一枝小学校であり、それと重なってしまいましたので、開会式を終えて抜けさせていただき、こちらに出席しました。幼稚園の先生、保育園の先生、そし

て小学校の先生と一同に会しての研修大会を、北九州市は40年近くやっています。今は特にこの幼保小の連携というのが大切で、就学前の子どもが小学校、中学校へいかにスムーズに上がっていくかが重要であると思います。

北九州市が「日本一子育てしやすいまち」を掲げていますが、その内容の充実を幼稚園連盟としても常に行政にお願いしているところです。

夏休みに入ってからすぐに、熱射病で2歳児の死亡事故がありました。これも他山の石として、幼稚園連盟として、各幼稚園もやはり外部評価等をもって襟を正し、また初心に帰っての保育ということ、研修会でも常に訴えてきたところです。

先ほどから出ている保護者のいろいろな意見、もう50年60年やっている幼稚園でも、なぜ今ごろこんなことを言われたいといけないのだろうか、今まで聞いたこともないような要望が出てきたりして、何か最近首をかしげることが多くあります。子どもはいいのですが、保護者の問題というのが非常に悩まされることです。

そうしたことから、この会議も何とか現実のものとして、実際に成されるような結果が出ればと思っています。保護者に対する研修会をやらうとか、あるいはパンフレットをつくらうとかではなくて、もっと研修会に出てこない親、あるいはパンフレットを読まない親をどうするのかという、具体的なところが何か出てくればと望むところです。

ご協力させていただければと思います。よろしくお願いいたします。

沼田委員：北九州市立小倉幼稚園の園長をしております。北九州市立と言いましたが、公立の幼稚園は現在、北九州市に8園あります。以前は15園ありましたが、いろいろな事情で現在8園になっています。その割合は、私立の幼稚園が97%で、残りの3%が公立幼稚園で北九州の幼稚園の中では本当にわずかです。

公立幼稚園があるということ、今日、初めて知った方も中にはいるのではないかなと思います。どういうことをしているかということ、この会の中で分かっていただけならと思って、私もここに参加させていただいています。

幼稚園は、子どもが初めて出会う学校と言われてます。文部科学省に所属していますので、教育委員会の中の公立幼稚園ということになっています。

それで現在、公立幼稚園は、「いきいき学びプラン」のもとで小学校、中学校と同じように指導計画を立て、小学校、中学校の育ちを見据えながら、幼児期ではどういうところを育てたらいいかということ、年間のプログラムを立て、3歳児、4歳児、5歳児の指導計画を綿密に立てて、一人ひとりの子どもの育ちをしっかりと見守りながら、育んでいます。

それで、特にどういうところに力を入れているかということになりますが、先ほどからいろいろ話題が上がっています「確かな学力」、それから「生きる力につながる」というところですけども、学力では幼稚園ではなかなか学力とはなりませんけれども、子どもが生きる力、その「育つ力」というところ、それから「育とうとする力」、それがどういうところで育まれているかということ、それを保育の中で読み取り、そこに先生たちが1人ずつに援助をしているのです。

それをただ教えるのではなくて、体験を通して自分が築いていかないと、いくら教

えてもその子のものにはなりません。それで、子どもが楽しく体験できるような遊びを、いろいろと考えながら指導計画を立てています。そこには、遊びの種類や、どういう環境の中でその遊びをすると、子どもにいろいろな気づきを感じ取らせることができるかということで、毎日の生活の中で記録を取り、ほかの幼稚園の保育参観、研究保育等を県外まで見に行きながら、先生一人ひとりが自分の力を身につけ、子どもの力につながるような指導力をつけているところです。

そこで今、幼稚園としても小中学校と同じように教育内容の充実、先生たちの指導力の向上に努めています。しかし園だけではなかなかその力は育ちませんので、保護者の力を借りています。保護者と同じ思いで育てないと、子どもは育ちませんから、保護者といかに子どもに向き合っていくかということが大切です。

それから、地域の方の力を借りないと、とても幼稚園の少ない人数の中ではできないこともあるので、地域の市民センターに来られる年長者だとか、学識経験者の意見をいただきながら、子どもの育ちを一生懸命援助しています。

また、今、幼年期教育研究大会という話がありましたが、幼稚園はこれから、公立だけでなく、私立はたくさん園もあり先生方の力もとても大きいので、いつもアドバイスをいただきながら、公立私立で連携しながら幼児期の子どもをどう育てていくか。

それから保育所との関係があります。今、幼保一元化など、いろいろな課題がありますが、保育所の先生とは同じ幼年期の子どもの育成ですので、幼稚園だけ、公立だけ、私立だけというのではなくて、幼保の連携というところにも、今、いろいろな会議を持ちながら、幼児期で十分に育てて小学校に送り出そうという話し合いを進めています。

そこで、幼稚園と小学校の段差があると、なかなかまたそこで育ちが難しいということで、幼小の連携についての研究も進めています。

この会議で、皆さんのアドバイスをいただきながら、望ましい幼児教育ができるようにと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

福原委員：小倉北特別支援学校の校長をしております。北九州市内に、市立の特別支援学校が9校ありますが、法律が変わりまして、これまでの養護教育から特別支援教育に大きく変わりました。それに伴って養護学校から本年の4月から特別支援学校という名称に変わっています。

その中で、地域のセンター的な機能として、小中学校を支援するという新たな機能が付加されました。自分の目の前にいる、在籍する子どもの実態が大きく変わっていく中で、通常の学級に6.3%いると言われている子ども一人ひとりの実態に応じて、社会参加・自立できるような、力を育てられるようなシステムが考えていければいいのではないかと、この会に参加しています。

いろいろなものが変化していく中で、特別支援教育元年として、足元をしっかりと見ながら、新たなものをつくっていかないと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

藤岡委員：自己紹介からさせていただきますと、60年間保育士の仕事を貫いてきました。こ

これは児童福祉法ができて、今年で60年ですが、私の保育人生と合致しています。

戦後すぐに、大学の通信教育が始まったときに玉川大学の通信教育を受け、もう亡くなられました小原國芳先生から、初等教育は木に例えると幹の学校だ。高等教育は枝葉の学校だと。根っこが腐ったら、すべて駄目になるのだということを強く叩き込まれまして、今でもそのことを信みたいなかたちで持っています。

私は保育所ですから、学校体系の中には入っておりませんが、この会に入る時に「保育所には教育とは関係ないだろうけど」というお言葉をいただきまして、「ええ、そうなのかなあ」と思いました。

実は、最近、公立民営化の保育所を受け、今2年終わったところですが、非常にカルチャーショックを受けています。70年の歴史ある園も経験してきましたが、70年間、親とともに子どもの保育に当たってきた園と、2年間の新しい園で、これほど違うものかという思いを持ちました。

保育所連盟は、公立と私立が一緒の団体で156園あります。子どもの数は約1万6,000人です。

平成8年に「気になる子が増えたね」という保育士たちの話から、子どもの調査をしたところ、3歳以上児の4.3%に気になる子どもというのがありました。去年、平成18年度に10年後の調査をしたら、10.8%と気になる子どもが非常に増えていたのです。これは現場の保育士たちが実感している問題で、この10年間に気になる子どもがどうして増えたのかという原因を探ったときに、やはり、愛情不足を実感している子どもや、親たちが忙し過ぎ、子どもとの触れ合う時間が非常に少なくなって、子どもの心が見えていないことも、合わせて同じように増えてきました。

一昨年秋に国連の児童権利委員会というところが、一般の意見から採択したものの中に、人生の出発点、初期における数年間の心と体の脆弱性について、もっと締結国は心を砕きなさいという提案をしています。

その心と体の脆弱性ということが、とても無視された子どもが2年間、公立の民営化がされたときに、非常にたくさんいたわけです。例えば夕方、保護者のお迎えが始まるとキレまくる子ども、いくら待っても、待っても現れない親、そういうものにごく愛情の希薄感を感じました。

我々の園では、毎年卒園期に、世界でたった1冊の絵本を子どもに作らせます。2カ月ぐらい一人ひとりの子どもに対応しながら、ストーリーからお話づくり、材料選択からみんな子どもがやります。その中の1人の子どもがつくるストーリーに「公園に行きました、ママがいました、でも僕には気が付かずに行ってしまいました」というフレーズが何度となく出てきました。これが、私たちが実際、気になる子の調査をした10年前と10年後の実態と合ってきているわけなのです。

少年サポートセンターの先生方の話も聞いたりしますが、5年生の少女が援助交際をする背景を調べたら、幼いときに、そばに寝てくれる人がなかった、誰でもいいからそばに寝てほしいというような意見も伺っています。

今問題になっている奈良の放火事件や、神戸の酒鬼薔薇事件にしても、乳幼児期に大人たちから愛されていない。そのことが現実に思春期の暴発につながっているということをつくさん目にします。

そうすると、今回の意欲というのは、「生まれてきてよかった」と、大人たちから愛されて、「私は、本当にこの世に生きてきてよかった」という思いを持ってないまま育て、思春期暴走族の予備軍みたいな子どもが、既に生まれて5年目にしているという実態があります。

限りない子育て支援による保育時間の延長や、仕事も子育てもという親たちの働き方の見直しの中で、病児保育、休日保育、全てが子どもと親とのかかわりを妨害するような方向で進んでいる。また、地域が、あるいはみんなが子育てを支援するということで、お金払っているじゃないの、というような親たちも増えてきております。その結果として、こういう問題が起こっているのではないだろうか。

一昨年の子童福祉法の改正で、私たちは、子どものケアワーカーとして、あるいは子どもの発達保障ということだけでなく、親指導もやることになりましたので、「飽きず、焦らず、あきらめず」かかわり続けてきましたら、2年経つと「変わったね」とみんなから言われるようになりました。

だからそこら辺で、駄目な親と決めつけずに、かかわり続けていくことの必要性を痛感しています。そういうことも、この会でも出てくればありがたいと思っています。

堀川委員：株式会社ホリカワの代表取締役をしております。それと北九州マイスターの認定を頂いております。今回、この会の要請がありました際、自分の耳を疑いまして、私みたいな者がこの教育改革会議に出て、何かいい発言ができるだろうかと2～3日回答を保留したわけです。そして電話がかかってきましたので、断るつもりが、ついつい「はいはい」と言ってしまったというのが現実です。

そこで、何をこの際申し上げたいかと言いますと、マイスターになりまして、大学、高校、中学、小学校と随分講演してきました。その中に行儀のいい学校もあるし、行儀の悪い学校もある。この違いは何だろう。戦後教育の弊害がここに出てきているのだろうか。

また、例えば日の丸の話をしたら、その校長は、僕が帰る時に知らん顔をして「ありがとうございました」を言えない。そういう教育が、実際、今の親を生んでいるのではなからうか。

学校というものは学ぶところであるし、親は子どもをしつけるものである。そういうことが分からない親をどうやって教育したのだろうか。また、平気で親の首をなただけ切ったり、残虐な行為をしたりする子どもを、今後どう救ったらいいのだろうかということで、ついつい来てしまったわけです。

この会議が、その親をどうやって教育し、現在の無責任な親になったかという最初の原因を見つけてから出発があるのではないかと考えています。だからまず原因を探して、それから討論・討議してみてもどうかと提言します。

それから、私は21日からまた1週間、ベトナムに参ります。これで7回目です。今の若い日本の子どもと、ベトナムの子どもを比べましたら、希望するものが全然違うのです。ベトナムの人たちは、1ヶ月30日間働きます。31日あったとき、その1日だけ休みます。そして、給料も共産圏ですからいくらと決めています。

そういう現状を見て、「ああ、日本はいつかベトナムに追い越されるな」と。いろいろ

るなことを追求して、原因を見て、子育てをやって立派な職人を育てる。日本は何もないのですから、職の能力があってこそ、日本経済が成り立っていくのです。どうかそういう子どもを育てられるように、この会議が実りあるようになってほしいと思って、参加させていただきました。ご指導のほどをよろしくお願いいたします。

彌登委員：来月60歳になります。幼稚園が枝光幼稚園第1期生、そして山の口小学校、中央中学校を卒業しました。私の母も山の口小学校を卒業しています。

卒業して以来、高校、大学、そしてヨーロッパに行っている間、北九州にいませんでした。それから帰ってきて、父の会社に就職し、青年会議所に入会したのが26歳でした。その後、教育問題委員会に出ており、いろいろなかたちで教育には、部外者としては携わってきました。また、50歳から11年PTA会長をやりました。

北九州青年会議所の理事長を終えた後、日本青年会議所の専務理事をいたしました。当時、日本青年会議所は6万5,000人、730青年会議所を組織として持っておりまして、その時に「子どもの学校どんなとこ運動」を全国展開でやりました。これは、父親が自分の子どもは、何年何組何先生のところで、前から何番目の席に座っているくらいのことは、知っておこうではないかということで、全国の会員の方々にお願いをした思いがあります。

その他とすれば、北九州ではインターナショナル・ファミリープランということで、海外の子どもを、日本で、ホームステイというかたちでお預かりする。翌年にはこちらの子どもを向こうにお預けするというので、もう40年続く事業をしています。

それ以外、3人の子どもを育て上げました。大学を卒業した時点で、家内と2人のうち教育が終わったなという話をした思いがあります。そうしますと今度、孫が生まれまして、孫のことも考えると、教育というのはずっとつながってくるのだなというようなことを、笑いながら話した思いがあるのです。

先ほど、現場で活躍をされている先生方の話を聞いていまして、PTAの見方として、親として言わせていただくと、もちろんそういう変わった親もいるというのは事実だと思いますし、我々からすれば、なぜこんな人が先生になったのだろうか、というような人も現場にいるということも事実です。

分かりやすくいうと、子どもを集めてリーダーシップをとっていくと、いつの間にか自分が偉くなったような感覚になって、上から物を言うようになってきます。長年続けてくると、変なかたちの教師というものが、分からなくなってくるのではないかなというようなこともあります。もちろん、一生懸命子どもの教育のために、頑張っている先生もいらっしゃると思います。

PTA会長をしている50歳の時に、教職課程を取り2年間福岡教育大に通い、教員免許をもらいました。大学では、とにかく日本一になりたいということで一生懸命柔道をしており、卒業と同時に、東京オリンピックの時に活躍したヘーシンク道場に教職課程を捨てて行ったため、単位が足りず落としてしまいました。それで、教壇に立ったわけではありませんが、同じ資格を持つことも、ひとつ大事なことでないかということです。

それと、画一化した子どもをつくるというかたちになっていますが、私の3人の子

どもは、学力も体力もすべて私好みといいますか、私たち夫婦がこんな子どもに、こんな大人になってほしいという価値観の元に育てていったという自信があります。いろいろな要望があってしかるべきだろうと思っています。

私の父も、私をそのように育てたと思っています。そういう意味で教育というのは画一化されるものではなく、愛情をもって、その子どもが持った良いものを伸ばすことが大切だと思います。すべては、教師の愛、親の愛、そして友情も含めて育てていくことが、地域としてやっていかなければならないことだと思っています。

最後になりますが、最近では、財団法人北九州活性化協議会の企画を担当させていただきまして、学校の校庭の芝生化の活動を始めました。現在、千葉から来ていただき、学校の芝生化を展開しています。県内はもとより、多く県外からも、学校の芝生化についていろいろと相談がありますが、一番の問題は、やはり予算の問題です。とにかく芝生の上で子どもを走らせたいと思っています。以上です。

元兼委員:まずはこのそうそうたるメンバーの中で、自分の立ち位置に非常に苦慮しています。

所属は、九州大学で教育行政学・学校経営学を担当しています。

立ち位置に苦慮するというのは、まずお聞きしていて、やはりその課題なりの共有化をするのに、随分時間がかかるのかなというふうに思った次第です。

私自身も人生の半分、前半は北九州にいましたが、出てしまうと意外に知らなかったことが、今回の資料でたくさん分かりました。先ほど、徳育だという話がありましたが、確かに、臨教審のころ、知徳体を言い換えて、徳知体というふうに言われました。ここでは、体育が最初に出てくる。そのくらい体育・体力が課題になっているということも知りませんでした。そういう意味で、どこから手をつけていいか、よく分からないのです。

今の私の仕事は、主に校長の支援をえています。現在、県の教育センターなどで、学校関係者の評価づくりとか、安全安心情報ネットワークづくりなどを考えています。

それから、意見の中で出ました、「子どもの権利条約」でいうと、志免町に子どもの権利条例というのを九州で初めてづくり、その委員を今えています。また、春日市と前原市のコミュニティスクールの立ち上げにかかわり、苅田町の教育改革会議もやっていました。

残念ながら北九州市とはなかなか縁がなく、教育論文の審査とか、市民コーチの研修会などでお世話になっていますが、それ以外には、市教組の講演やJCの青年会議所に来たことなどです。

そうしたときに、私は求められるままに仕事をしていますが、求められ方がこの間変わったと思っています。私が以前、福教大にいたころは、とにかく現場に刺激を与えてカンフル剤になってくれという要求が強かったのです。しかし最近、少し状況が変わってきて、JCに2～3年前に伺ったときも、むしろ教育界のことを分かってもらうために伺うというか、アカウンタビリティとして分かっていただくため、また支援を求めるため、理解を求めるために行く、というふうに立ち位置が変わってきたことを実感しています。

外から見て思うのは、北九州市の場合、1つは政令指定都市としての悲哀を感じて

いるところとか、地域としたときに、地域というのをどこから立ち上げていくのか。

私が生まれたころの5市合併の分断は随分なくなったと思うのですが、ではコミュニティというのをどれぐらいのレベルで立ち上げていくかなど、そういうところで、北九州市の難しさというのをすごく感じているところです。

私は今、非常に小さな町に住んでいます。駅が1つしかなく、町簿を見ても大体知っていて顔が出るという、そういう生活の実感があるところで暮らしているので、余計に政令指定都市というのは、一体どういうふうを考えるべきなのかということを考えています。

座長には負けますが、3歳から6年生まで、3人の息子の父親もやっております。県内回っても、なかなかここで子育てしたいという場所を見出せないでいますが、是非この会議を通じて、孟母三遷の教えではありませんが、北九州市で子育てしたいという方が増えるような一役を担えたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

加藤委員：毎日新聞で新聞記者を34年間していきまして、主に教育・福祉・障害児教育という分野を取材してましたので、声がかかったのだらうと思います。

先ほど、委員からえん曲にマスコミの悪口を言われた時に、多分皆さんも、書かれるために解決が難しくなるという思いをたくさん持っていると思うのです。それは、私も一理あると思っていますので、ざんげの心も込め委員を受けさせていただきました。

教育については、2つの重要なことがあると思います。1つは子どもを中心に考える。もう1つは、方針がころころ変わらないということです。

子どもを中心に考えるというのは、親のこと、学校のこと、先生方のこと、教育委員会のこと、文部省のことで対立した時には、必ず子どものほうに立つということが大切だらうと思います。

2つ目のころころ変わらないということ。非常に腹立たしいニュースが報道されています。安倍さんの時に教師を増やすということで、そのために教育予算を増やすという方針が決まっていたにもかかわらず、安倍さんから福田さんへ変わった途端、予算増額が財務省の横槍でなくなりそうだとしたことなのです。まだ、何カ月もたっていないのに方針が変わる。これでいいのかと思うのです。

また、2002年4月に、教育指導要領の改定がありました。その時に、これはゆとりの教育の仕上げということで総合学習の時間が取り込まれたのですが、指導要領が改定される直前に当時の文部科学大臣の遠山さんという女性の方が、ゆとりの教育を否定するような発言をして非常に揺れたということがありました。ですから先ほど、先生方はたくさん力があるのだが、どんどん、ころころ方針が変わることで対応できないのだという話を委員がされましたので、そういうふうにならないようお願いをしたいと思うのです。

先ほど、学力観を聞きましたが、この“いきいき学びプラン”に書いてある学力観は、まさにゆとりの教育に基づいた学力観なのです。ですから、ひょっとしたらこの会議の学力観というのは変わっているのではないかと心配して、聞いたのですが、変

わっていないということで安心しました。

北橋市長は1期目です。恐らく最低でも3期はなさると思うのです。ですから、あと10年間はこの会議での方針が継続するという、それくらいどっしりとした議論をできたらいいと思います。

昨日お送りいただいた資料を、全部目を通したのですが、気になる点がいくつかありました。1つだけ言います。

最も気になったのが、学力と体力重視という視点はありますが、文化芸術を重要視する視点が全くないというふうに感じました。心の教育が大切だと言いながら、それでいいのかと素朴に疑問を感じました。

学力、体力についてもなぜ体力なのか、なぜ学力なのか、何のために学力なのか、何のために体力なのか、というところをきちんと教えていただきたいと思いました。浅学菲才ですが、皆さんと一緒に議論をしていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

座長：皆様、貴重なご意見ありがとうございました。皆様方のご意見を聞いて共通するところは、現状に満足しないとか、子どもを取り巻く問題、あるいは子ども自身にもいろいろな課題があるのではないかと、そこを考える必要がある。というところでは一致した見解ではないかと思っています。

ただ、その際のもっていき方だとか、切り口については、それぞれ多様なご意見がある、あるいは多様な見方があるということこそが、この会議のメンバーで考えていくという意義ではないかと思っています。

当然今後、これをとりまとめていく際も、必ずしも1つの結論を出していくというわけではありませんので、どうしても見方が対立する、あるいは2つ立てざるを得ないという場合には、やはりこういった視点、こういった視点があるということを併記して提案をするといったとりまとめの方法は大切にしていきたいと思っています。

それから、全体の方向としては、教職員が働きがいを感じるような学校づくり。また、子どもがぬくもりを感じるような家庭や、いろいろな体験活動。それから親がゆとりを持って子どもや家庭づくりに向き合える。そういったレベルでは、意見は大体一致すると思うのですが、ではそれを具体的に、どういうふうに進めるのかとか、どうなれば子どもがそのぬくもり感じると言えるのかなど、各論の部分になると、これもまた意見がさまざま異なってくるかと思っています。

今日は皆さんそれぞれ順番に発言しただけで時間になりましたが、論点やテーマについては、改めて会議を設定し、次からはテーマを絞り込んで、少し委員同士でやり取りをし、場合によっては行政に新たな資料や、データ収集、あるいは行政の見解を求めていきたいと思っています。

先ほど最後の意見で、なぜ体力だとか、学力にこだわるのかということなど、これまでのプランの検証や、評価を行うことも、この教育改革会議の役割になります。

こういう視点をもう少し修正したほうがいいのではないかと、あるいは見直しをする必要があるのではないかとということがありましたら、この改革会議としては提言を行いたいと思います。

それに基づいて、実際変えていくかどうかは、最終的に教育委員会、行政の判断ということになると思います。市民の多様な意見を、風通しをよくし、公開しながら伝えていくという、そういった橋渡しの役割がこの会議にあるかと思います。

ご意見の中で皆様が北九州市教育委員会、行政がよくやっていると、普通はお褒めの言葉が中心になるようなあいさつが多いのですが、今日はこういった点が足りないというようなことが、多々出てきたような自己紹介と意見だったと思いますので、やはりこの教育改革会議のメンバーの選定、あるいは進め方にしても、北九州市も多様な意見を聞きながら、変えていくのだという意気込みを、私なりに感じたような次第です。

今、私も申しましたが、皆様方の意見等も踏まえながら、事務局のほうで論点の整理を行っていただき、次回会議に今後の議論のテーマを含むスケジュール等の作成をしていただきたいと思います。

なお、議事のテーマ等については、事務局のほうで作成、整理していただきますが、私、座長と事務局とで調整をさせていただいて、次回の内容、テーマ等を絞り込んでいきたいと思いますので、この整理、それからテーマの設定に関しては、私と事務局のほうに一任していただきたいと思います。よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声)

座長：それでは、事務局のほうも整理をよろしくお願いします。本日の議題は終了になります。最後に、事務局から連絡事項等あればお願いします。

事務局：ありがとうございました。次回の開催日程につきまして、本日、事前に調査したものを回収しております。17名の方から回収しておりますが、現在のところ11月27日の都合がいい委員が一番多い結果となっておりますので、次回の開催日につきましては、27日を軸に調整をさせていただきたいと思います。座長よろしいでしょうか。

座長：はい。現在出ているスケジュールに合わせて、27日という提案ですので、皆さん方の日程が出そろった段階で、再度最終確認したいと思っています。現段階では第2回会議は、11月27日火曜日を軸に調整をさせていただきたいと思います。よろしいでしょうか。

それでは、27日を軸に皆さんのスケジュールが全員出そろった段階で、再度確認をしたいと思っています。

事務局：それでは、事務局から全委員の日程をとり、追って、正式な通知をさせていただきますと思います。それと、本日、参考配布として、北九州教育データ集を配っていますが、さまざまな基本的なデータを載せております。もしこの中で、もっとこんなデータが欲しいというものがありましたら、事務局に遠慮なく申し付けください。可能な限り対応させていただきます。よろしくお願いいたします。

座 長 : それでは、「第1回子どもの未来をひらく教育改革会議」を、これで閉会させていただきたいと思います。皆さん、長時間にわたりありがとうございました。